

# キャッチャーガールの 進路相談

第1話

—恋ちえ



同い年で幼馴染みの中村文博なかむらことブンちゃん、会話の頭に「そういえば、」をつけるのは決まって聞きたいことがあるときだ。

直子が小学一年生のときに東京から隣の家に越してきたブンちゃんは、周りの同級生たちよりもずいぶん大人っぽくて垢ぬけた少年だった。頭がよくて物知りで、クラスメイトのくだらない日常の疑問にも冷静に答えてくれる。気付けば『物知りブンちゃん』のイメージが貼りついていて、そのせいか自分から質問することがすっかり下手になってしまったらしいのだ。

例えばクラスの男子たちがバラエティー番組のギャグを再現していても、「それなんなの？」とすぐに元ネタを訊いたりはない。ふらつと直子の席にやってきて、算数の宿題の解説や委員会についての話をはじめ。それが一通り終わってようやく、「そういえば、竹内と浜野がしているのは何？」と、まさに今初めて気がついたみたいな顔で訊ねてくるのだ。

六年生に進級してもブンちゃんは相変わらずだった。

「そういえば昨日、親に言われたんだけど」

トイレから教室に戻ってきた直子に、日直のブンちゃんは黒板を消しながらふと思いついたように言った。

「そろそろ中学をどうするか決める時期だって」

ブンちゃんは一年生の頃からずっと塾に通っている。

「私立に行くってこと？ ブンちゃん受験するの？」

直子はタオル地のハンカチをポケットにしまつて訊ねた。

「しないよ。こんなト田舎の私立なんて、ほとんど公立とレベル変わらないんだから。そうじゃなくて一中と二中が選べるってヤツ。だいたい前に説明あつたでしょ」

「んー、あつたっけ？」

直子は首をひねりつつ記憶を引っ張り出してみた。

まず学区のことだ。直子たちが通う船津ふねつ小学校の児童は、卒業後、住んでいる学区で進む中学が決められる。だいたい七割が第一中学で、残りの三割が第二中学だ。

「その学区の境界線の上に家が建っている児童は、どちらか好きな方を選択できるってやつのこと。思い出した？」

ブンちゃんの補足で直子は「ああ」と頷く。直子やブンちゃんの家のある辺りがまさにそれなのだ。

事を理解した直子にブンちゃんはつんと鼻先を上げて本題に入る。

「うちの親が気にしてただけど、直ちゃんはどっち行くの」

「ブンちゃんは？」

「僕が先に訊いてるんだよ」

質問を質問で返すと、ブンちゃんはこちらを見てきゅつと眉を寄せた。

「もしかして迷ってるの？」

「違うよ。慎重に吟味してるんだ」

「どっちのマラソン大会の距離が短いかな？」

「どっちの校風が自分に合っているのか、授業内容とテストス

ケジュール、学級崩壊は無いのか、地域との関係性とかボラunteィアとか」

「ふーん。それならプールの授業があるかどうかも項目に入れた方がいいと思うよ。深さとか、ビート板オツケーとか」

「……今、真面目な話をしてるんだけど」

「でも現実的にプールも大事でしょ」

直子は真剣に言った。こっちだって大真面目だ。運動音痴のブンちゃんがかうっかり溺れてしまわないか、毎年夏が来る度に心配しなければいけないのだから。

ブンちゃんは一瞬むくれた表情になったが、周りを気にしてすぐに取り澄ました。

「わかった。マラソンもプールも一応チェックリストに足しておく。でも僕が訊きたいのは直ちゃんがどっちに進むかってことで、だれも僕の心配をしてほしくないなんて頼んでないから。」

——それで、どっち？」

「一中だよ」

問髪あげずに答えると、ブンちゃんは目を大きく見開いた。

「……へえ、そうなんだ」

それから直子の顔を覗き込み、あることに気付いた。

「まさか野球目当て？」

「ぴんぽーん」

ブンちゃんはおおいに納得したらしく、「単純明快な選択だね」と黒板消しを端から端へと移動させながら言った。

「ずっと前から決めてたから。最初に中学が選べることを知ったとき『どっちが野球強い？』って親に聞いて、それで一中に行こうって」

第一中学は野球の強豪校として地元以外でも有名だ。参加校が多い中体連の大会で、県ベスト8の常連にもなっている。一方の第二中学といえば市大会の初戦敗退が常。最近は成績が伸びているという話も聞けれど、それでも隣の強豪校には足元にもおよばない。

直子は自分が第一中学に入学することを、すでに決められた義務のように思っていた。それが当たり前すぎて中学を選べること自体忘れていたくらいだ。

「楽しみだなあ。強豪校の練習ってどんな感じかなあ」

「でも一中の野球部って女子も入れてくれるの？ 聞いたこと無いけど」

「え？ 入部くらい誰でもできるでしょ？ 男女ビョードーって社会で習うくらいだし。そうだ！ ブンちゃんも一中にしなよ。絶対上手くなるって」

ブンちゃんはチョークの粉にむせたような顔で直子を見た。

「なんで僕が……」

「迷ってるなら丁度いいでしょ。ほら、これで問題も解決するし」

テストではほとんど百点のブンちゃんだが、その反動なのかとにかく運動ができない。プールと球技は特に駄目だ。そんな

息子に危機感を持ったブンちゃんのお母さんは、ブンちゃんに直子と同じ少年野球チームに入ることを命じたのだ。

あれは四年生の春だから、ブンちゃんが野球を初めてもう二年だ。塾の合間をぬって水曜日だけ練習に顔を出しているけれど、上達する気配はまるでなかった。運動センスが壊滅的なのだ。

ブンちゃんは黒板消しを置き、綺麗になった黒板を満足げに眺めていた。背が高いので一番上まできっちり拭き取られている。野球をやるのにもう少し身長が欲しい直子にしてみれば、ちよつと分けてほしいくらいだ。

しかしブンちゃんは案外別のところでクラブに貢献していたりする。

「今思い出したんだけど、この前ブンちゃんに教えてもらったボールを使う鬼ごっこ？ あれ、やってみたら低学年の子に好評だったんだ。やつぱり小さい子とか、まだ下手な子にはああいう練習の方がいいよね」

「本に書かれてただけで、別に、僕が考えついたわけじゃないから」

「ふーん、野球雑誌とか？」

ブンちゃんは「忘れた」とそつげなく返事をする。口元がわずかに引きつっていた。直子はそれがどんな本なのかぼんやりと想像ができた。たぶん、「はじめてのやきゅう」とか「プロ野球選手になるには」とか。そんな類のタイトルのついた全編

カラーページのやつだ。

負けず嫌いのブンちゃんの頭の中には、野球の知識が豊富に詰まっている。不運なのはその知識に身体能力がついてこないことだ。

学校から下校した直子の在宅時間は非常に短い。だいたい平均で二分だ。「ただいまー」と帰ってランドセルを置き、着替えておやつを口に突っ込み、「行つてきまーす」とまた家を出る。

行き先は船津区民グラウンド。ここで週四回、直子が所属している少年野球チーム——船津オリオンの練習が行われている。

直子が少年野球をはじめたのは、周りが男ばかりという環境のせいだった。向かいの家の子どもが男ばかりの三人兄弟で、右隣の家も男の子一人。裏の家は姉と弟の兄弟だけれど、姉の方は五つ歳が離れていて、一緒に遊んでくれるような雰囲気ではない。だからといって家に引きこもっていられるような性格ではない直子は、外遊びしている男子の輪に幼い頃から喜んで混じっていた。

これが性に合っていた。

小学校に入ってからもクラスの女子たちの人形遊びは参加せず、直子は上級生の男子たちの真似をして野球クラブに入った。

低学年の頃こそ「女のくせに来るなよな！」などと男子に意地悪をされたりもしたけれど、今では憎まれ口など誰一人叩かない。なぜなら小学四年生のとき四十人弱が所属する船津オリオンのキャッチャーとして、最年少でレギュラーに任命されたからだ。

「ナイスピッチー！」

ミットの中に飛び込んできたボールを、直子は投球に負けないくらいピシッと投げ返す。同じ六年生でピッチャーの隼人が満足げにそれを受け止めた。隼人とはバッテリーを組んでまだ一年も経たないけれど、去年一緒にやっていた一つ上の投手よりも相性がいい気がしている。

「ねえ、隼人って中学どっち？」

直子はブンちゃんとの会話を思い出して、ふと気になって訊ねた。

「中学？ 一中だけど」

「そっか、よかった。今の六年で他に一中に行くのって誰だっけ？」

「さあ、確か浜岡とシンタと、あとアッキー以外は全員一中じゃなかったかな」

「二中って意外に少ないんだ」

「このグラウンドの場所が一中寄りだからだろ。——可部井もか？」

「うん、そのつもり」

直子は隼人や他のメンバーと共に、中学の大会に出るところを想像した。強豪校で練習を積めば今よりもっと上手くなるだろう。別の小学校からも上手い選手が入部するだろうし、そうなれば全国大会だって夢じゃない。

やっぱり第一中学だ。

直子が改めて意思を固めたとき、三年生の二人組が連れ立ってやってきた。低学年の中でも上達が早い健太と勇樹だ。

「あの、お願いがあるんですけど」

と健太がおずおずと言った。

「僕たち次の大会で初めてコーシキ戦に出るんです。だから、練習を見てもらえませんか」

「公式戦？ 低学年にそんなのあったけ？」

隼人が不思議そうに直子に目配せした。

「ゴールデンウィークに市の大会があるでしょ。今年から低学年の部もできたって監督が言ってたから。——そのことでしょ？」

「はい、そうです」

「あーはいはい、あのでかいトロフィーがもらえるヤツね」隼人は手の中でボールを弄もてあそびながら頷く。「去年は俺たち惜しかったよなあ」

確かに去年は惜しかった。決勝まで行きながら、隣の区のエースピッチャーのスローボール。彼は確か直子たちと同級

生だったので、今年もまだいるはずだ。

「で、どうすんの?」

隼人は下級生二人と直子を見比べた。

「教えてあげよう。初戦なんて緊張するに決まってるんだから」

「俺らの練習は? 今年は最後だから全部の大会でできるだけ

いい成績狙うって言ってなかったか?」

「だからって同じチームの子をボロ負けさせるわけにはいかな  
いでしょ」

直子の宣言に、健太と勇樹はばあつと表情を明るくさせた。

その次の水曜日のことだった。

「悪いけど今日は行けないから」

帰りの会も終わりランドセルにせつせと教科書をつめている

最中、直子はブンちゃんからクラブを休む報告を受けた。(一  
向に上達はしないけれど)ブンちゃんが練習を休むのは、去年

風邪を引いたとき以来だ。

「どうかした?」

直子は覗き込むようにブンちゃんの顔をうかがった。こっ

そりパウダーをはたいている女子よりも白い顔をしているが、  
これは日焼けしてもすぐに戻ってしまう体質のせい。特に体の

調子が悪いわけでもなさそうだ。

「今日、これから一中を見学に行つて来る。だから監督に伝え  
ておいて」

ブンちゃんは少し唇を尖らせ、大人ぶった表情で言った。け  
れども直子が第一中学のことを「はいそうですか」と聞き流せ  
るはずもない。

「えー、ブンちゃんだけずるい!」

「……ずるい、つて何が?」

「だから野球部の見学に行くんでしょ? わたしもピッチング  
練習の様子とか、キャッチャーを近くで見たい!」

「いや、学校見学に行くだけで、部活は見るつもりないんだけ  
ど」

「今のうちに監督に売り込んでおくつていうのもアリだよな。  
——ついてもいい?」

「だから、部活は見ないつて」

「なんで!」

直子の勢いにブンちゃんが一步後ずさる。「なんで、つてな  
んで……?」と、オウム返しにつぶやいた。

「あ、アッキー!」

直子は教室を出ようとしているセカンドの選手を見つけてす  
かさず呼んだ。

「へーい?」

「わたしとブンちゃん、今日のクラブ休むから! よろしく!」

「デートか?」

ドアから顔だけを覗かせたアッキーが大声で訊き返した。当  
然、帰宅準備をしていたクラスメイトたちが次々顔を上げて振

り返る。女子たちは口を手を当てて色めき立ち、男子らは面白いネタを見つけたと言わんばかりに悪戯っぽい目をららんと輝かせた。

「直ちゃん、マジ?」

「エー、全然知らなかったあ」

大誤解だ。「ちがーう、中学の見学に——」と説明する直子の横を、ランドセルを担いだブンちゃんがさつさと通り過ぎていく。

「ええ? ちょっと!」

見捨てる気だ。遠ざかっていく後ろ姿からもうもうと不機嫌が立ち昇っていた。

直子は囁ささしたてるクラスメイトをかきわけて後を追った。やつと追いついたのは生徒玄関だ。すでにスニーカーに履き替えたブンちゃんが下駄箱の端に寄りかかっていた。その腕は神経質そうに組まれている。一応、待っていてくれたらしい。

「違っって言っつといたから」

「……」

「一緒に行つてもいい?」

ブンちゃんはしばらくして深く息を吐いた。直子を映す瞳には諦めの色がにじんでいる。

「行く前に言っておくけど、校舎の中を見るのが目的だから。

野球部はついでだから」

「わかつてるつて!」

「それも遠くから眺めるだけだからね。声掛けるとかは無し」  
「覚えとく」

るんるんと上履きを脱ぐ直子に、本当に大丈夫かな、とブンちゃんは愚痴っぽくこぼした。

二人は一度家に帰り、それから自転車で第一中学まで行くことにした。

中学校舎に続く坂道は下から見上げたときのなだらかなイメージとは違い、こげばこぐほどペダルが重たくなっていく。

「直ちゃん、降りた方が楽」

早々に自転車から降りたブンちゃんが、坂の下からアドバイスをした。

「いいの! もうちょっと!」

残り数メートルなのに今さら諦めるのも癪さげだ。直子が額に汗して登りきったあと、遅れてブンちゃんも到着した。

「まず事務室に行こう。うちの親が連絡入れてるはずだから」

「突撃じゃないんだ」

「突然遊びに来た子どもを歓迎してくれる学校なんて、今日本には無いよ」

ブンちゃんは息を整えてから、客用らしき玄関の方を指差しした。

駐輪場の隅に自転車を置かせてもらい、二人は受付で事情を説明した。20代くらいの若い女の職員さんとブンちゃんが話している間、直子は壁の額縁に飾られた『愛情 友情』の文

字を見つめていた。

「ではこちらのスリッパをお使いになって下さい。中村君と、えーっと…」

「可部井です」

答えたのはブンちゃんで、突然自分の名を呼ばれた直子はハツとして顔を上げる。事務室から出てきたお姉さんが、すぐそばで直子に向かって微笑んでいた。

「スリッパをどうぞ、可部井さん」

「あ、ありがとうございます！」

「どういたしまして。それじゃあ最初に3階まで上がって、それからぐるっとまわりましょうか」

お姉さんは愛想良く言って二人に校舎の中を案内した。授業はすでに終了し、今は部活動の時間らしい。吹奏楽部のパート練習の音が下の階や奥の教室から漏れ聞こえる。

「ここがL1教室。英語のリスニングに使うことが多いわ。そっちは書道用の教室で、中で活動しているのが書道部。うちは運動部だけじゃなくて、文化部も積極的に大会や賞に参加しているの」

やや緊張の面持ちになっている二人に、お姉さんはバスガイドのように第一中学ならではの特色を丁寧な説明してくれた。卓球部、美術部、それからダンス部なんてのものも出くわした。少女たちは軽快な音楽に合わせて、華奢な手足をキレよく動かしている。

直子は真剣に活動に取り組む部員たちを見るたび、野球部のことが気になって仕方がなかった。本当はさっさと探しに行きたかったが、ブンちゃんとの約束もある。

しかしチャンスはすぐに訪れた。校舎と体育館をつなぐ1階の渡り廊下の真ん中で、直子はずいぶん、グラウンドにいる野球部員たちを発見したのだ。

「直ちゃん？」

前を歩いていたブンちゃんが足を止め、直子の視線を追いかけた。

「野球、好きなの？」

と訊ねる。

「はい！ わたし、ここの野球部に入りたいんです！」

突然の告白に驚いたのか、お姉さんは長い睫毛をパタパタとおおぎ、それから口元をやわらかく緩めた。

「それならもっと早く言ってくれたらよかったのに」

「あの、あとで見学してもいいですか？」

ブンちゃんの眉がピクリと動く。お姉さんはこちらの事情など知るわけもなく、「もちろん」と快く承諾してくれた。

最後に体育館の中を見学したあと、三人はもと来た来客用の玄関に戻った。「ご両親と話し合って、よく考えて決めてね」お姉さんは最後まで笑顔をやささず、そう言って二人を見送った。



さて、ここからがメインディッシュだ。

ブンちゃんは意気込む直子の後ろを黙ってついてきた。言っても無駄だとわかっているとき、ブンちゃんは余計な抵抗しないことにしているそうだ。まさに今、その教訓を実行しているところなのだろう。

校舎裏にまわり、三棟あるプレハブ小屋の脇を通り抜ければ運動部の園は目の前だ。

トラックがある奥の陣地では陸上部がハードルや短距離走を繰り返して、その左手前でサッカー部がパス回しの練習をしている。野球部が使っている範囲は、ネットで仕切られた部分を含めて一番広かった。

練習は学年ごとに分かれているようだ。黒土が敷き詰められた専用の練習場を使っているのは三年生だろう。体格のいい選手たちが守備練習をしている。その脇でティーバッティングしているグループが二年生で、ダッシュを繰り返しているのは一年生か。

直子は辺りを見回し、そこに見知った顔があることに気がついた。

「ねえ、あれって瀬戸君かな？」

「どれ？」

直子が指差した先に、ブンちゃんが目を細めた。

「背恰好はそれっぽいね」

「見て！ あっちは尾野君。うわあ久しぶり。そういうえば尾野

君ってニコ上だったよね」

二人とも船津オリオンで共にプレーした戦友だ。一緒にあざやかなダブルプレーを決めたこともあるし、大事な試合の作戦会議中に大喧嘩をしたこともある。

知っているのは元チームメイトばかりではなかった。別の野球クラブに所属していた面々もちらほらと混じっている。点を取られた選手の顔は特によく覚えていた。憎き敵にも、ここに入学すれば好敵手として出会えるのだ。

直子は気持ちが悪くなった。今すぐ練習に加わりたくない。

「わたし、絶対一中にする。ちょっと挨拶してくるね」

「え!？」

「せっかくここまで来たのに、アピールしとかないと損でしょ」

直子はブンちゃんを振り切って、グラウンドに続く石段を駆け降りようとした。

そのとき野球のユニホームに身をつつんだ小柄な少年が、背後から二人を抜かして行った。ラッキーだ。直子はとっさに声を掛けた。

「あ、ちよつと！ あのー！」

少年は急転換し、石段の途中で振り返る。自分を止めたのが小学生とわかれると、直子たちを見て「誰？」と不審そうに眉を寄せた。

「わたし、来年こちらに入学する可部井直子です。野球部に入りたいんですけど、今、監督がキャプテンに挨拶させてもらってもいいですか？」

直子はびしっと体の横に手をつけて、はきはきと喋った。

目の前の少年はどう見てもキャプテンじゃない。顔つきはクラスメイトと似たようなもので、体格は直子の方がよっぽど立派だ。なにより身につけているユニホームが真っ白だ。おそろくこの春中学生になったばかりのピカピカ一年生だろう。

少年は要点を飲み込むと「ちょっと、待ってて」と、三年生のいる練習場に降りて行った。

ブンちゃんが哑然として直子を見た。

「予想はしてたけど、本当にやると思わなかった」

「わたしたち、って言った方が良かった？」

「言ったら帰ってたよ」

「そう言いつつ、結局入部することになるパターンでしょ」

「ならないよ！」

ブンちゃんとかく知らない言い合いを続けているうちに、さっきの少年が、なぜか女子を二人連れて戻ってきた。

「この子です」

女子二人に少年が直子を紹介する。てっきりいかつい監督がキャプテンがやって来ることを想像していた直子はこの事態についていけない。

「わかったわ。ありがとう」

と、この中では一番上級生らしき片方の女子が、少年に練習に戻るよう促した。

後輩が去り、女子二人は改めて直子に向き直る。

「可部井さん、だっけ？ はじめまして、私がキャプテンの森山です」

「キャプテン!？」

さすがの直子も驚いて声が裏返った。県で一、二を争う強豪校のキャプテンが、女子!? 少し、いや、かなり先進的な発想だ。

「それから、こっちは二年生の町田さん」

森山さんは直子の戸惑いも気にせず、続けて隣にいるもう一人の女子を紹介した。

「来年は彼女が引つ張っていつてくれる予定だから。ね、リサちゃん」

「あんまりプレッシャーかけないで下さいよ」

町田さんは苦笑し、嬉しそうに直子を見た。

「野球経験者?」

「あ、はい。そうです」

「じゃあ大丈夫。大変だけどやりがいのある仕事だから。たぶんすぐに慣れちゃうよ」

「仕事?」

どこかで話がずれているようだ。それに気掛かりがもう一つ。どうして彼女たちは体操着なのか。

「ちょっと、いいですか」

じつと気配を消していたブンちゃん、耐えられないとばかりに口を開いた。

「勘違いされているようですが、彼女、選手希望ですよ」

え？ と女子三人の声が重なる。

ブンちゃんは「やっぱり」という顔で森山さんを見た。

「あなたはマネージャーのキャプテンですよ」

「え、そうなんですか!」

「ええ、そうなの……」

森山さんは歯切れの悪い返事をし、町田さんの方を振り返った。

「どうしよう。女子って聞いたから、私はっきりマネージャー

志望かと」

「あたしもです。こういう場合ってどうなんですか?」

「前例がないから高坂先生に聞かないと何とも言えないわね」

森山さんは困惑した表情で直子の肩の辺りを見つめる。直接

口にはしないものの、二人の間に「無理じゃないかなあ」という空気が流れはじめていた。

このままではマズイ。直子は食い下がった。

「わたし、船津オリオンというチームでキャッチャーやってるんです。四年生の時からレギュラーで、雪の日でも外走ったりしてます。ちょっとくらいきつても大丈夫です! だから」

「今、どこのチームって?」

「船津オリオンです」

森山さんは少し考えたあと、

「柴崎先輩も確か、オリオンじゃなかった?」

と、町田さんに訊ねた。それは直子にも聞き覚えのある名だった。

「あの、柴崎由紀ちゃんですか!」

「そう。やっぱり一緒だったのね」

「はい!」

直子は嬉しくなって大きく頷いた。

ユキちゃんは4歳年上で、直子よりも先に船津オリオンに所属していた、クラブ初の女子選手だ。真面目で面倒見がよく、「女が野球なんて」と馬鹿にする男子を二人で泣かせた思い出がある。

在籍中はたった二人きりの女同士ということで何かと可愛がってもらったが、ユキちゃんが小学校卒業と同時にクラブを引退してからは顔を合わせる機会も無くなっていった。

「ユキちゃんは、いま?」

「今年の三月に卒業したの」

「あ、そっか。ですよ」

中学校でユキちゃんと一緒に野球をするには、あと2年も早く生まれなければいけなかったということだ。

直子はそこでふと思った。森山さんはさつき、女子選手の入部は前例のないことだと言った。

「もしかして、ユキちゃんもマネージャーだったんですか？」  
「うん、名マネージャーだったよ。わたしもすぐお世話になったの」

町田さんはやさしく微笑んだ。

「そうなんですか……」

「どうかした」

「ユキちゃん、クラブの男子なんかよりもずっと野球が上手だったんです」

正直がっかりしていた。確かに第一中学は強豪校だけれど、ユキちゃんなら男子に交じってやっていくくらいの実力はあったはずだ。船津オリオンにいた頃は、男子を押し退けてレギュラーを獲得していたのだから。それがよりによって男子の世話係だなんて。

「わたしは、マネージャーじゃなくて選手になりたいです。試合に出て、活躍して、チームの優勝に貢献したいんです！」

直子は体の横でこぶしを握った。

クラブでもそれ以外でも、ユキちゃんは直子にとつて本当の姉のような存在だった。ずっと憧れていた。ユキちゃんのバッティングを真似てみたり同じメーカーのシューズを選んでみたりもしたけれど、今回ばかりは後に続くことができないと思っ

た。  
「野球をやりたいっていう気持ちはわかるわ」森山さんは直子を見つめた。「わたしたちは、そういう選手と毎日活動を共に

しているから」

「じゃあ」

「でも可部井さんが入部するには、きっと色々な問題があると思うの。一番は——」

話の途中で町田さんが森山さんの腕を引つ張った。「先輩、先生来ました」

直子は校舎の方を振り返る。背が高くがっしりとした体形の男がこちらに近づいてきていた。想像していたより若く、30代半ばくらいだろうか。日に焼けた顔には、はつきりとした厳しさが彫り込まれていた。きっと日頃からそういう顔なのだろう。

「高坂先生、今お話いいですか？」

「なんだ？」

立ち止まった高坂先生は切れ長の目でマネージャー二人を見て、それから直子を見て、そのあとブンちゃんにもチラリと視線を配った。

「入部希望者か？」

森山さんと町田さんは顔を見合わせた。

「よくわかりましたね」

「そんな感じだからな」

「……僕じゃありません」ブンちゃんが遠慮がちに申告した。

直子は一歩前に出て高坂先生とまっすぐに向き合う。それからすうつと息を吸った。

「はじめまして、来年、この中学校に入学する予定の可部井直子です。こちらの野球部に選手として入部したいと思って見学に来ました！」

「選手として?」

「はい! お願います!」

高坂先生は一呼吸おいて答えを出した。「駄目だ」

「なんで!? 女子だからですか!」

「そうだな」

「わたし、男子と同じ扱いで大丈夫です! 練習も同じ量できます!」

現に今だって男子と同じ量の練習をこなしているのだ。中学に進級したからといって、それが不可能になるとは思えない。

しかしいくら言い募っても、高坂先生が首を縦に振ることはなかった。

「本人がよくても、周りはそうはいかないんだ。君がどこまでできるか知らないが、男子と同じことをし続けるには無理がある。とにかくうちの野球部に関しては、今後も女子を取るつもりは一切ない」

「そんな」

何か反論しなくては。このままでは本当に入部できなくなってしまう。言い返そうと一歩踏み出した直子の肩を、ブンちゃん素早く掴んだ。

「帰ろう」

直子は信じられない思いで幼馴染みを見た。こんなときこそ、その頭脳で援護射撃してくれるべきではないだろうか。

「——森山、ノックの準備だ。町田も補助を頼む」

「……はい、わかりました」

マネージャー二人が遠慮がちに返事をする。

選手たちの元に行こうとしている高坂先生を、直子は慌てて引き留めた。

「待って下さい、わたし!」

「申し訳ないが大事な練習試合が近いんだ。私は生徒たちを見なくてはいけない。——見学ならいくらでも構わないが、この話は終わりにしてほしい」

きっぱりと言い切る高坂先生に、とりつく島はどこにもなかった。直子はグラウンドに降りていくその後ろ姿を何もできずに見送った。

「ごめんなさい」

森山さんが眉を寄せて謝る。

「マネージャーなら歓迎だから、考えが変わったら来て」  
直子は無理に微笑んだ。ありがとうとございませう。そう言おうとしたが、声が上手く出なかった。

つづく